保健医療学部長に聞く

学部が輩出する 将来の医療職とは

保健医療学部長×学生対談

保健医療学部　学部長
教授　片寄　正樹
Katayose Masaki

【学部長】札幌医科大学で学生生活を過ごす中で、どんなところに本学の良さを感じていますか？

【工藤】本学の看護学科は1学年50人と少人数であるため、同期の絆がとても強いことが魅力だと思います。実習や定期試験、日々の課題などもともに頑張る仲間たちがいるから乗り越えられました。この先の将来も、本学でともに学んだ同期の皆がそれぞれの道で活躍していくのだと感じ、誇らしく思います。

【黒滝】本学の特色の1つである少人数教育に良さを感じます。同じ目

理学療法学科 第4学年
黒滝　杏樹
Kurotaki Anju
函館中部高等学校出身

標へ共に頑張っている仲間が身近にいることを実感でき、とても刺激になります。定期試験や実技試験はみんなであれこれと話し合い協力して乗り越えることも多いです。また、先生方と話をできる機会が多い点も少人数教育の良さだと思います。

【田辺】少人数教育により学科内の繋がりが深まることや、学科間の合同授業も多くそれぞれの学科の専門性についても学ぶことができる点が本学の良さだと思います。また、私は地域医療に興味があるので、学年が上がるにつれ学びの場を学外に広げ、実際に地域の方々と交流する機会が増えることも良さの1つだと感じています。

本学で学んだこと

【学部長】本学でどんなことを学び、どんな成長ができたと思いますか。

【工藤】看護において、対象者一人ひとりの“生活”や“人生”を捉えた個別的なかかわりが重要であるということを学びました。日々の学習の中で積み重ねてきた知識や技術に加え、実習などでの刺激的な経験から、対象者を一人の人間として尊重する心や、思いを受け取る感受性を磨くことができたと感じます。

【黒滝】意見を正しく言語化する力が身についてきたと思います。レポート作成の際やペア・グループ活動を通して、曖昧、不正確な言葉遣いで伝わらないもどかしさを感じました。また、他人にも影響を与えかねないという危機意識を持つようになり、内にある考えを共有する、理解してもらううえで伝える能力を磨くことは重要だと思います。

【田辺】対象者の支援には疾患特性や治療法、福祉制度などの教科書的な基礎知識に加え、その人が置かれている環境や大切にしている作業などの個別性を重視した視点が必要であることを学びました。日々の授業や実習からそうした経験を積み重ね、物事をあらゆる視点から考える力を徐々に身につけることができていると思います。

【学部長】看護学、理学療法学、作業療法学の専門性はもとより、医療人としての素養を支える知識やコミュニケーションスキル、そして人間性がとても重要であることの気づきがありましたね。

研究の意義

【学部長】卒業論文についてどう思いますか。

【工藤】研究というのは、学びや経験から自らの疑問や課題を発見し、それに対する答えなるものを追究するという過程だと思います。大学での研究を通してアカデミックな追究心を身に付けることができ、未来を担う医療者として、多くの人々や社会に貢献することにつながると思います。

【黒滝】卒業論文は入学してから多くを学び、知り得たことで生まれた漠然とした疑問、興味を明確化、追究するものだと思います。そのため、大学での学びの集大成になると思います。これは、多くの時間、労力、人の協力の上で完成し、一生の財産になるものでもあると思うので私も力を入れて取り組んでいきたいです。

【田辺】自分の興味から自由にテーマを決め、常に自主的に取り組むので、日々の学習にも力が入ります。本学は設備も充実しており頼りになる先生もついているので、研究に打ち込める環境が整っていると思います。また、皆が違ったテーマで研究するので、学友の発表から自分にはない視点を得ることができるところにも面白さを感じています。

【学部長】素晴らしい学びを得たと思います。そしてその成果に嬉しく思います。みなさんがこれから向き合う保健医療の現場にはまだ答えのない課題も存在します。これらを謙虚にみつめ、研究成果を踏まえた新たな知見を応用実践していくという誠実な姿勢が常に求められることになります。臨床の場にいても常に研究マインドを持ち続けていく保健医療人になってもらうために、卒業論文の作成という学習プロセスを通して学んでもらいました。

私たちが目指す、これからの地域医療

【学部長】目指すこれからの地域医療のありかたはどのようなものでしょうか。

【工藤】これからの医療は、より地域的な視点をもって対象を捉えることが求められると思います。少子高齢化がすすむいま、「住み慣れた地域で生活し続けたい」という人々の普遍的なニーズに対し、医療や福祉といったサービスをいかに満足に提供できるかが課題であると

作業療法学科 第4学年
田辺　千紘
Tanabe Chihiro
釧路湖陵高等学校出身

看護学科 第4学年
工藤菜乃花
Kudo Nanoka
室蘭栄高等学校出身

思います。対象者一人ひとりのニーズに応えるため、医療者は地域の様々な機関との連携を通して、個別的で質の高いサービスを提供する必要があると考えます。地域的な視点をもって人々の健康を支え、その基盤にある“生活”を支えることが看護師の役割であると思っています。

【黒滝】私の目指す地域医療は人々のそばにある医療です。この“そば”にあるというのは物理的距離だけでなく、心の拠り所としての意味も含みます。そのために、受け身で患者さんを待つのではなく予防の働きかけ、地域の人々の日常に介入し、実際に助けを必要とした時この人たち、この場所があるというだけで安心感を与えられるようにしたいです。

【田辺】実習を通して、ご本人の望まれた生活を送ることが難しい方が多くいることを知りました。私たちの持つ専門性は、病院内のわずかな時間だけに留まらず、対象者の暮らす地域でも発揮できると思います。より医療と地域の連携を深めた包括的な支援体制を確立することで、誰もが地域で自分らしく生活できるまちづくりを進めるべきだと考えています。

【学部長】我が国における様々な社会課題を背景に、地域医療における保健医療職の活躍の可能性は広まるばかりです。みなさんが思い描く地域医療を、他職種連携という本学での学びもあわせて実現させていってほしいと思っています。